▲刻書土器「林？」（合川町井葉出土）
土師器の皿の底面に、焼かれる前にヘラなどで「林」に似た文字が書かれています。左半分がありませんので、２文字あった可能性もあります。

▲須恵器人面硯（合川町阿弥陀出土）
須恵器の硯の脚部分に、人の顔を描いています。目から上部分が欠けていますが、ユーモラスな鼻や口が笑いをそそります。

出土品紹介③　～国司たちの生活～

▲須恵器 高坏（合川町風祭出土）
食べ物を盛り付けるために使用した、高い台が付いた器です。高貴な人の食器でしょうか？

▲土師器 鉄鉢（合川町井葉出土）
内面を黒く燻し、外面は黒漆を塗って表面をきれいに磨いて仕上げています。仏教関係の特殊な土器です。

◀国司館の食器（合川町井葉出土）
国司館が広がるギャクシ・柿ノ内・井葉・風祭地区では、大量の皿や椀などの食器類が出土しますが甕などの調理具はほとんど出土しません。国府に勤務した国司たちが、屋敷の中で宴会などを頻繁に行っていたことが想像できます。

今後にむけて

昭和36（1961）年に始まった筑後国府跡の発掘調査は、平成23（2011）年に50年目を迎えます。長年の調査は多くの事実も発掘し、合川町や久留米という地方に限らず、日本の歴史をも解明してきました。その一つが、国府長官の住まいである国司館の発見です。国司は都から派遣されてくる貴族などですが、地方でどのような生活をしていたのかを示す資料は断片的なものしか残っていません。しかし、国司館が発見されたことによって、国司の生活を具体的に想像することができるようになりました。大量の食器類の出土や遠方から運ばれきた貴重な土器などからは、国司たちの華やかな暮らしが想像できます。

全国でも類を見ないこのような成果は、国指定史跡というかたちで後世の子孫たちに伝え残されることになりました。これは、地元の皆様のご協力があってこそのものです。平成８（1996）年に国史跡に指定されて以来、久留米市では史跡指定地の公有化を進めてきました。指定地は広大ですが、これは筑後国府跡の重要さを示しているとも言えます。今後は、史跡指定地を歴史公園などとして整備し、市民の皆様に活用していただきたいと考えております。

▲史跡指定地に立つ筑後国府跡の解説板

▲筑後国府跡の国史跡指定地